

スリランカの地図を見ると、南東に位置するカタラガマはごく最近になって旅ガイドに登場するようになった。内戦が終わってやっと観光国として注目され始めたのであろう。かつて、私の中のスリランカ仏教域は文化三角地帯で、アヌラタブラ、ポロンナルワやキャンティでしかなかった。ところがある機会に、スリランカをより深く理解しなければならぬことに遭遇した。

スリランカ詣でが頻繁となり、毎回同一地域ばかりでなく多方面に足を延ばさねばと訪問地を広げた。今そのことが善い縁となったことで感謝している。

🔥火渡り儀礼

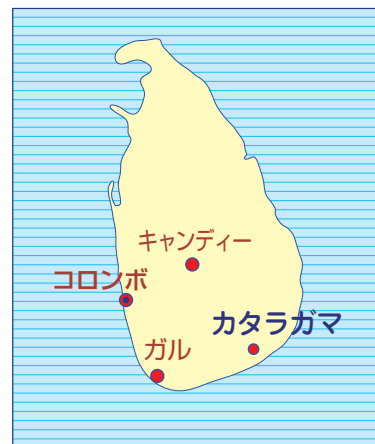
以来、古代都市名跡や壮麗な寺院から、さらに遠方にあるカタラガマへの道に思いを馳せた。私の「カタラガマ・イメージ」は、他のどこの寺域よりも色彩鮮やかで、タミールとヒンドゥ教、風変わりなエセラ祭であった。特別に心にかかるのは水切り祭りと火渡り儀礼がカタラガマでは脈々と継承されていることであった。火渡りは19世紀初頭に南インドの苦行僧らによって時々行われていたが、世紀後半には毎年間断なく行われるようになったといわれている。日本の寺院風景にも、護摩修法があり類似するところがある。例えば真言密教、山伏行者の修業に



ヒンドゥ神を祀るカタラガマ神殿に向かう門

(Google Panoramioから、Mauro Ornella氏撮影2011年)

は勿論の事、東大寺における修二会お水取り、お松明にしても、ルーツを探し辿って行けば無関係とはいえないのである。カタラガマのそれは、自からの力を新たなものにするという厳



粛な行だと受け止められている。私流の理解では、炎のように燃える煩惱を清浄化・消滅させて昇華させ、あらゆる罪や過ちを懺悔し、万民豊楽を祈るということである。日本とスリランカの見解はあたらずとも遠からずの形であると納得している。

🔥北伝仏教・南伝仏教

インドに発生した「仏教」は、中央アジア、シルクロード、中国大陸から朝鮮半島を経由して日本列島に到ったのは北伝仏教である。

一般に「仏教の東漸」と称されるが、南インド、スリランカ、東南アジアの仏教域を南伝仏教という。前者の北伝仏教を後者の南回りで入ってきたカタラガマと比較したり照合するのは興味深い。南伝仏教と北伝仏教の接点に少しだけでも触れ、足を付けてみたいとの思いが続いていた。私が注視することは、ヒンドゥ神を祀るカタラガマ神殿と仏教聖地であるキリ・ヴィハーラが同じ境内にあるという、配置の妙を実際にこの目で見ることであった。

🔥スカンダ神信仰

2015年2月28日、ガンパハ市にある平和寺の住職がガイドを買って下さった。運転をお任せのスリランカ人、日本スリランカ友の会Y会員と私を乗せた車は、カタラガマを目指した。車中、住職が「カタラガマ物語」を話してくださり拝聴した。カタラガマ神の前身は南インドのスカンダである。スカンダとは日本名を韋駄天といい、足の速い人という場

合がある。禅寺の庫裏で見かけるので、食べ物に不自由なく暮らせる守り仏である。スリランカに於いては政治家たちが選挙に勝つよう、また、ビジネス効果がありますようにというスカンダ神だのみがあるらしい。19世紀にはシンハラ人に拒絶されたスカンダ信仰が、20世紀にどうして甦って活躍中なのであろうか。

俗域・結界・聖域

車を降りると辺りは直射日光で眩しく、一步一步の足運びも重く感じた。民家のようなお泊り宿らしいような家が建っている。

歩いていくと捧げ物の細工品や土産物、食べ物を売る小さな店が目に入ってくる。お皿の上に乗せる供物や花束を売る露店があって、日本でいえばさしづめ浅草観音様の賑わいである。蓮の花がもったいないほど置かれていたり、ポリバケツの中で華やかさを誇っている。「ここは南伝仏様の国」を痛感した。マニク河に掛る橋をわたる時「お参りする人はここで、手足を洗い清め、沐浴をして神殿に入ります」と、サマ・マビハラヤ住職が教えて下さった。「ここが俗域と聖域の結界となります」とも加えられた。土足厳禁の神殿入口まで200mぐらいなのに熱射で長い道程に感じてしまう。世界各地から訪れる参拝者が多いとガイドブックに書かれていたがそれほどでもないと感じたのは、大祭のような仏事イベントの日でないからであろう。

参道から神殿へ

参道から見ると公園広場らしいところに、子どもたち、学生たちが同じコスチュームで集まっていた。その近くから笛や太鼓、弦楽器の音色が流れてくる。軽快なダンスをしているグループにも出会う。

神様たちへの讃歌と信仰形態であろうか。道路の中をゆったりと歩いているのはヒンドゥ教で大切に扱われている野牛らしい。何匹もの犬が行ったり来たりしていたのは野良犬だと住職が言われた。矯正されて「不殺生」の教えが守られているのだそうだ。

黄色いアーチ型はどこでも見られる神殿の入り口である。裸足で進むと中央右手に本殿、お隣はガ



仏教聖地・キリ・ヴィハーラ

(Google Panoramioから)

ネーシャ神などを祀っているヒンドゥの神殿かと思う間もなく、後からお参りの人・人に押され、日本仏教界でも知られているヴィシュヌ神は必ず拝まねば…と、うろうろしている内に外に出されてしまった。建物は大きくないが、もっとゆったりとした気持ちでまた訪ねてみよう。

キリ・ヴィハーラで思う

カタラガマ神を日本式巡拝スタイルで抜け出ると、500m位の道を一直線に歩く。横に花屋さんがあったのが分かっているのだが、目の大きなお椀型の仏塔に圧倒されてしまった。キリ・ヴィハーラである。正面の階段を上って行くと雰囲気が一変した。外壁に沿って仏像が安置され、座っている人、花束や供え物を捧げる人、念じる人、祈る人がいる。しかし、静かである。あの結界となる小川を越えて、境内に入った中心部に、カタラガマ神殿があった。

その騒音と喧噪、賑々しく派手な色彩、人間臭い世界からキリ・ヴィハーラへの道。静寂と平穩の仏域の建物の創建は、紀元前7世紀だといわれている。その白い塔に至るには、ヒンドゥの神々を拝せずしては辿りつけない不可思議な配置設計であり、両者の共存共栄が見られる。カタラガマはスリランカ仏教史の縮図そのものであるといえる。スリランカ中北の仏教遺跡とは対照的なカタラガマは、独特な仏教聖地として存在感を誇っている。グローバル仏教文化の源流地点のような感じがした。